

鹿児島大学学生の英語運用能力に関する調査報告

— 小学校英語教科化を控えて —

坂本 育生 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

A questionnaire survey report of English proficiency of Kagoshima University students: Before the implementation of English education as an elementary school formal subject

SAKAMOTO Ikuo

キーワード：英語教育、アンケート調査、英語運用能力、小学校英語、各種英語技能検定試験

1. はじめに

本研究は2015年以降数回に渡って実施した、鹿児島県内における大学生への英語に関する意識調査に続くものである。前回同様に鹿児島県内の大学生に対し英語で得意な分野、英語力、英語資格についてアンケート調査を行った。調査結果よりアンケート調査の対象となった学生の多くが、英語を苦手と感じていること、小学校英語に対しやや否定的な意見が多いこと、その一方において、各種英語技能検定試験に対する意欲が上がっていることがわかった。また英語学習者でも、将来的に英語を使用する可能性が高い学生は、英語に対して積極的に学習する傾向が見られた。このデータを参考にして、いよいよ2020年度から始まる我が国の正規科目としての小学校英語教育への、ひとつの指針となれば、筆者としては大きな喜びである。

2. 21世紀における日本の早期英語教育の主な流れ

これまで主に大学生に向けて英語に関するアンケート調査を行い、数多くの回答を得てきた。主に小学校で英語を学んできた学生へ向けてのものであったが、英語学習者には、極端とは言わないまでも英語運用能力の差、また二極化（注1）の傾向が見られてきた。もちろんどの時代においてもその差はあったものの、現在の日本人の低い英語力の状況は、21世紀のグローバル化著しい国際社会において、英語が事実上の国際語であるという前提のものでは、国際コミュニケーション能力の向上のためにも、英語教育関係者が解消しなければならない重要な課題と考えられる。

ところで、小学校英語教育の正課科目としての導入が、ついに2020年度に始まることとなった。2000年頃に全国の小学校で始まった「総合的な学習の時間」での小学校外国語活動は、事実上小学校英語となり、2011年からは5、6年生で必修となり実施されてきた。細かい流れは文部省のホームページまたは研究者、企業の報告などで確認することができるのでここでは多くを触れないが、2020年度からは、いよいよ本格的な正規教科としての英語教育が、日本全国で始まる。

現在実施されている小学校英語が、中学校以降の英語教育と異なっているのは周知のとおりである。つまり外国語活動では、主に音声を中心に「外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うこと」を目標として、様々な活動を行う小学校英語教育は、試験中心の中学校以降のものとは相入れない部分もある。例えば、中学以降のテストでスピーキングを取り入れている学校はいまだに少なく、さらにまた受験勉強という側面を持つ英語学習には馴染まない点も多い。この点において、小学校英語に対する否定的な意見も一部にみられるようである。さらに小学校英語教育の問題の中でも一番の関心事の一つは、小学校英語を指導できる十分な指導力を持った教員の問題であろう。この問題は小学校英語の導入時から問題となっているが、小学校の教員で英語を習得し、かつ英語教育を行なえる教員が非常に少ない現状は、一長一短には解決できない問題である。

一方、現在大学に在籍している学生のほとんどは、上記で示した小学校英語教育を受けてきた世代である。その効果に関しては数値的に測ることは難しいが、早期に英語学習を始めることによって、プラス、もしくはマイナスの影響はあったと思われる。

3. これまでの一連の報告による英語運用能力に対しての大学生の傾向と本報告の目的

ここ数年間で複数回のアンケート調査を行い、学生の英語に対する意識を調査してきた。大まかな傾向として英語は苦手と感じているが、学習を続けていきたいという回答が多かった。しかしながら、2017年度の調査より多少の変化が出てきた。苦手と答える学生が多いのは変わらないが英語が苦手な英語力に不安のある学生の回答が目立つようになった。この傾向は当初予想していなかったもので、小学校英語を学ぶことにより学生が英語に親しみ、中学校、高等学校ではより意欲をもって学習していると想定していたのである。

鹿児島大学の理系学生に対して行ったアンケート調査（坂本、2015）では受験期間に高い英語力を持っていた学生たちは特に英語に対して苦手と感じる傾向はなく、一方英語力に不安のある学生は苦手と感じ、また4技能においても肯定的な回答は少なかった。

2015年に実施した中高一貫校でのアンケートによる英語に対する意識調査（坂本、2017）では、英語に対する苦手意識を感じている学生が多く、4技能においては読むことは得意という回答は多いが、書くことが苦手と答える学生が多かった。

しかしながら、2017年に坂本が実施した鹿児島県内の1年生に行ったアンケート調査では、やや否定的な意見が見られた。アンケート回答者は英語力に不安を抱えている学生たちで、特に小学校で学んだ英語が中学校以降で活用しにくかったという回答が多かった。以上のように調査を始めて以降、英語が苦手と答える学生が過半数を超えている状況が続いており、この傾向はますます強くなっていくと想像される。その原因を特定することは難しいが、ある程度の推測をすることは可能であろう。

そこで、一連のアンケート調査を踏まえて、さらなるデータを収集するための研究と位置付ける。

対象は学生であることは変わらないが、ほぼ全員が2011年度より始まった小学校英語の教育を受けてきた学生である。また過去行ってきた研究との比較検討も行う。

4. 調査方法とアンケート内容と結果

前回の質問項目と新たに1項目を付け加えて、鹿児島大学1、2、3年生の合計89名の学生に対して以下のアンケート調査を行った。アンケート項目は11項目で、4つから7つまでの質問から1つを選ぶ形式となっている。内容は4技能の中で得意なもの、英語力、学習意欲、小学校英語が中学校で応用できたかどうか、苦手と感じた時期、資格試験について回答を求めた。以下にアンケート内容、アンケート結果を百分率で示した表を提示し検討する。特に重要と思われる質問に関してはグラフで表示している。

「英語力、英語学習、英語資格試験に関するアンケート調査」

鹿児島大学教育学部英語科 坂本育生

以下の英語教育についてのアンケート調査への回答をお願いします。なお匿名式となっておりますので、貴方自身の英語教育に対しての率直なご感想をお聞かせください。なお今回の調査の具体的なデータ結果は、数値のパーセントのみを記述した箇所と、分かり易いようにグラフにして記述した箇所の両方がある。

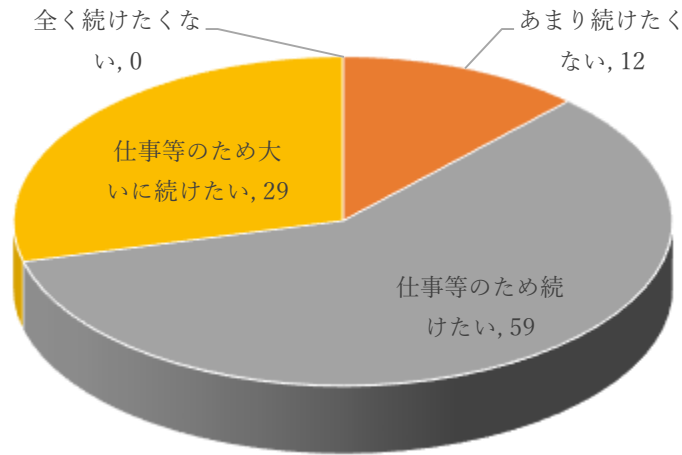
(1) 英語で得意なものは何ですか。あてはまるもの1つをお答えください。

1. 読むこと (59%)
2. 書くこと (13%)
3. 話すこと (13%)
4. 聞くこと (15%)

(1)の質問に関しては今までのアンケート調査と同様に、読むことが得意であるとの多くの回答を得た。この結果の理由として、主に中学校、高等学校で行われている英語の授業が読むことに集中し、高校、大学入試においても、英作文やリスニングテスト等の配点に比べて、読解問題の配点比率が高いことに由来すると考えられる。TOEICのようにリスニングと読解の比率を50%ずつにするという動きもあるが、多くの外国人が暮らす都会の学校と、それ以外の学校との格差を助長するという声も多く、今後の動向に注目する必要がある。

(2) 大学以降も英語学習を続けたいと考えていますか。

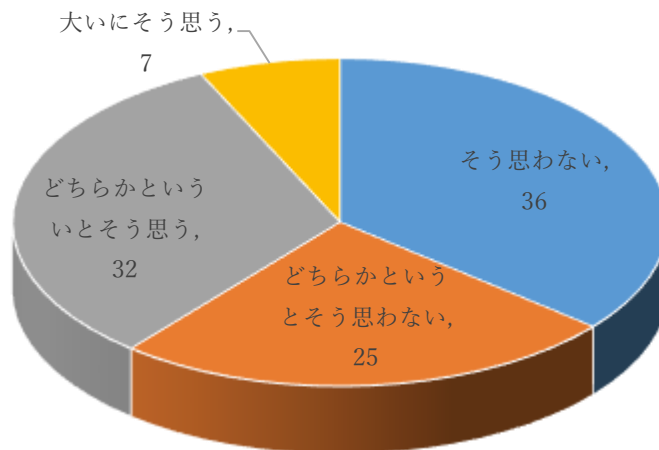
1. 全く続けたくない
2. あまり続けたくない
3. 仕事等のため続けたい
4. 仕事等のため大いに続けたい



(2) では英語学習が仕事に関係する場合は学び続けたいという回答は多く見られた。学生たちが就職などの一つのアピール事項としての英語力を求めている傾向は以前より続いていて、よりTOEIC や英検などの民間英語資格の重要性の影響もうかがえる。

(3) 小学校から中学校に進学した際に、小学校から学んできた英語が中学校で活用できましたか。

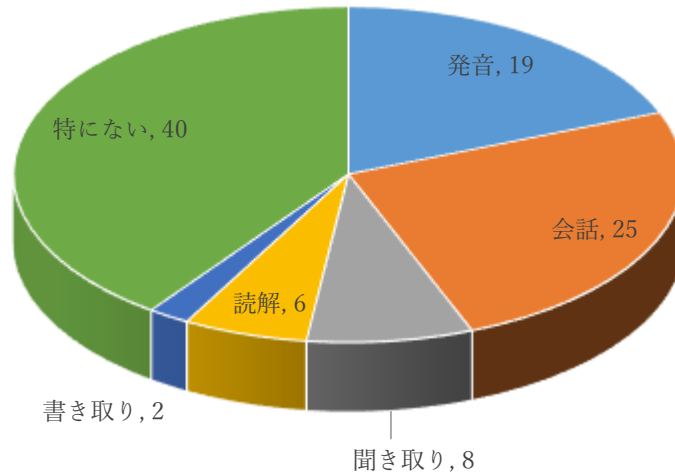
1. そう思わない
2. どちらかというと思わない
3. どちらかというと思う
4. 大いに思う



小学校英語の学習効果が中学校の英語学習に影響があるかどうかについては、議論が絶えないところであるが、実際のところはあまり役に立っていないとの結果が出ている。本質問も数回鹿児島県内の学生に行ってきたが、結果は類似しており、推測としては、主に受験を意識した中学校英語教育には、コミュニケーションを重視した小学校英語が馴染みにくいと思われる。

(4) 小学校英語を学んで良くなった、改善したと思われる項目を選んでください。

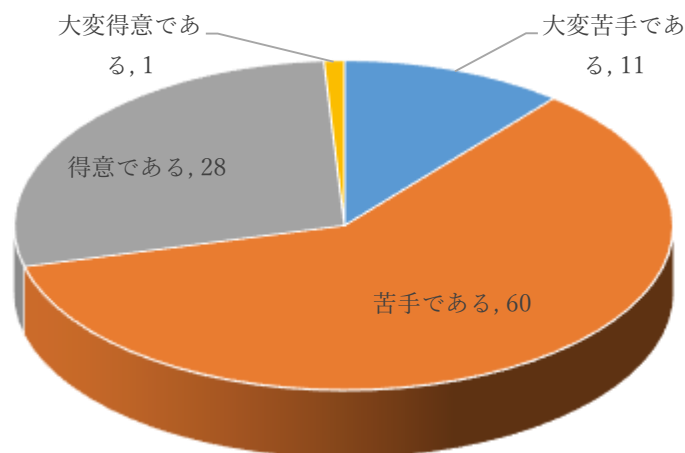
- | | | |
|-------|---------|---------|
| 1. 発音 | 2. 会話 | 3. 聞き取り |
| 4. 読解 | 5. 書き取り | 6. 特にない |



小学校英語教育では主に会話を重点的に行っているために発音や会話力が向上したという回答する学生がいることは当然であるが、本研究では特にないと答えた学生が4割に上った。この調査結果のみからの推測ではあるが、小学校英語実施反対の方々から、小学校英語の効用が疑われるかもしれない。

(5) あなたは英語が得意ですか、それとも苦手だと思いますか。

- | | |
|------------|------------|
| 1. 大変苦手である | 2. 苦手である |
| 3. 得意である | 4. 大变得意である |



年々英語力に不安を抱える学生が増えつつある傾向は見られていたが、今回のアンケート調査では従来に増して、より顕著な結果となった。苦手、大変苦手と答えている学生が7割を超えている。

過去の中高一貫校での調査においても、英語力が苦手な学生が多いという同様な結果がでたが、今回の学生でも同様であった。

(6) いつ頃から英語を苦手と感じるようになりましたか。あてはまるものの番号を1つお答えください。

1. 中学1年の前半 (17%)
2. 中学1年の後半 (6%)
3. 中学2年の前半 (8%)
4. 中学2年の後半 (8%)
5. 中学3年の前半 (11%)
6. 中学3年の後半 (21%)
7. 特に苦手な時期はなかった (29%)

本質問では予想通り中学校英語が始まる中学1年の前半と、受験期の中学3年の後半に苦手と感じた時期が集まった。しかしながら特に苦手な時期がなかったと答えた学生が3割に上ったことから、全体的な苦手な時期の判断はできなかった。

(7) TOEIC (Test of English for International Communication) を受けたことはありますか。

1. 受けたことがない (76%)
2. 一回受けたことがある (17%)
3. 複数回受けたことがある (6%)
4. TOEICを知らない (1%)

大学受験への民間資格導入に関して英検、TOEFL, GTEC など複数の試験が採用されることとなったが、TOEICはその採用を見送る決断をしたのは驚きともいえる。実際に TOEIC は日本国内では英検と並び、英語力を測る優れた指標として多くに受講者がいる。多くの学生が受験のために準備をしていたと予想されるために IIBC の決断は大きな影響を与えるだろう。(注2) 今回の調査は大学生であるために、その影響はほとんどないないと思われるが、本調査では TOEIC を受けたことのない学生が非常に多い結果となった。

(8) TOEIC を受けようと考えていますか。

1. 受ける予定は全くない (1%)
2. 必要であれば受けたい (41%)
3. 受けたい (31%)
4. 是非とも受けたい (27%)

(7) の結果とは対照的に、TOEIC を受けたいと回答した学生は7割を超えている。(2) での回答と踏まえると、仕事と就職で必要と考えている学生にとっては、TOEIC は就職に非常に有利な資格であり、受講に前向きな回答をしたと考えられる。

(9) 実用英語検定試験 (英検) を受けたことはありますか。

1. 受けたことがない (25%)
2. 一回受けたことがある (19%)
3. 複数回受けたことがある (55%)
4. 英検を知らない (1%)

実用英語検定試験 (英検) は日本国内でも学生が受験する機会の多い民間資格であり、7割以上の学生が受験したと回答している。この傾向は次の質問事項にも大きく関連するが、全国津々浦々で実施され、もっとも古い歴史を持った「実用英語検定試験」の役割が、さらに再認識されている

ように思われる。

(10) 英検を受けようと考えていますか。

1. 受ける予定は全くない (19%) 2. 必要であれば受けたい (52%)
3. 受けたい (12%) 4. ぜひとも受けたい (17%)

多くの学生が英検を今後も受けたいと回答した。その動機の一つは就職の際に資格欄に書き込むための資格の一つとして記載したという考えがあると思われる。また、自信の英語力の向上を測るものとして活用していると思われる。特に2020年度以降、大学入試にも各種英語検定試験の導入が決まっている現状では、もっとも一般的な試験である英検受験者は、さらに増加するかもしれない。

(11) GTEC を受けたことはありますか。

1. 受けたことがない (20%) 2. 一回受けたことがある (16%)
3. 複数回受けたことがある (60%) 4. GTEC を知らない (4%)

鹿兒島大学では、共通教育英語の一環として、一時期 GTEC を実施していたので、多くの学生が受験したと回答した。また今回のアンケート対象の学生は民間資格での大学受験を受ける機会はないと思われるが、今後入学してくる学生で GTEC を受講する学生は増えていくであろう。

アンケート結果からは学生たちは主に英語を苦手としており、仕事や就職などに必要であれば学びたいという回答が多かった。この傾向は以前実施した調査でも同じようなことが言え、将来的に活用できるという前提で英語を学びたいという意見は変わらない。医学部や歯学部などの基本的に英語力の高い学生や、今回数は少ないが英語教員を目指している学生などでは英語が得意であり、将来の仕事で使うためにその動機付けは高いと判断される。英語学習の動機、高い英語力は将来の進学、就職に必要とされる学生が持っているとも言えるであろう。そのため学生に英語学習を進めてもらうためには英語の有用性、将来性を理解するよう働きかけることが求められる。

5. まとめ

一つの結論として、学生の英語運用能力向上の傾向は一貫しているが、特に本調査からは、苦手と感じる学生の数が増えてきているように思われる。その原因を探ることは非常に困難であるが、英語学習期間内のどこかでつまずいて、その結果苦手意識を持ってしまい、そのまま大学に進学している傾向が続いているように思われる。今後21世紀の国際化が一層進む状況において、英語力、特に英会話力の向上は必須と言えるため、英語教育関係者は、早急にこの問題を解決しなければならないだろう。

さらにスペースの関係で詳細は記述できなかったが、今回のアンケートの自由記述欄でも、実践的な英会話力の向上を望み、実用的な授業を望む声が多かった。今後は大学においても、従来の読解和訳の授業のみでなく、音声を中心として実用的な授業を望む声が多く、多くの学生から訴えられて

いる。大学側としても彼らの声に一層耳を傾けなければならぬであろう。

(注)

- 1) ここの2極化は、主に英語運用能力、英語学習に対する意欲（モチベーション）の差を言及している。
- 2) 2020年度から始まる大学入試共通テストで、一般的な英語検定試験として人気の高いTOEICが参加を取り下げたことに、多くの驚きの声が上がった。

参考文献

根岸雅史、酒井英樹他（2014）「中高生の英語教育に関する実態調査2014」ベネッセ教育騒
総合研究所

坂本育生（2015）「鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究（1）」『鹿児島大学教育学部研
究紀要』 第67巻 pp. 55－63

坂本育生（2017）「中高一貫校における現代英語教育の意識調査—学生の得意不得意を中心とし
て—」『鹿児島大学教育学部実践研究紀要』 第26巻 pp. 217－224

坂本育生（2017）「鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究（2）」『鹿児島大学教育学部研
究紀要』 第68巻 pp.

坂本育生（2018）「鹿児島県内における英語力に不安を抱える学生への意識調査—小学校外国語
活動の教科化を目前にして—」『鹿児島大学教育学部実践研究紀要』 第27巻 pp. 78－84